底魚資源の漁場開発調査（漁業資源調査）

金城　宏

1．目的

一本釣り漁場の対漁種であるフエダイ類(マチ類)は、過密操業のため漁場資源は減少し、小型が見られる。このため水深500m前後のマチ類(ハマダイ)の漁場開発調査を目的として、その漁場分布調査を３航海予定していたが、新図南丸の建造に伴い、20年余漁場調査船として活躍してきた図南丸が売却されたので１航海の調査で終えた。

2．調査方法

調査船図南丸(219,09トン)で底立延縄(10本付×100立縄)を使用して試験操業をおこなった。餌はムロアジを輪切りにして使用した。調査海域の水深は300～500mの範囲とした。漁獲は船上で体長体重を測定(サメ類は体長測定し海上投棄)して氷蔵にして持ち帰った。

3．調査経路

①第１次調査

期間：平成６年12月12日～12月16日

海況：伊平屋島の北側の偉業ソネ、伊平屋ソネ、相ノソネの水深500m斜面を調査海域として出港したが、強い高気圧の張り出しで風波強く操業できなかったので、伊是名島の西側及び伊江島近海で１日目に２回操業、２日目は慶良間近海で２回操業した。

漁況：結果は表１のとおりで２日間で４回操業を行った。有用魚種はマハタモドキ１尾、ギンメダイ１尾、マンザイウオ２尾、ムツ２尾、キビレアカレンコ、ハナフエダイがそれぞれ２尾、その他はカクザメとサバフグで264尾であった。水深は320～350mの岸礁帯で行ったが、特にサメ類のツマリツノザメ、フジクジラ、フトツノザメが多獲され有用魚種の漁獲は少なかった。また、ナキナワヤジリザメが４尾漁獲された。

4．今後の課題

東支那海の大陸棚斜面下及び八重山海域の水深400m～500mのマチ類の資源調査を実施する必要が有る。

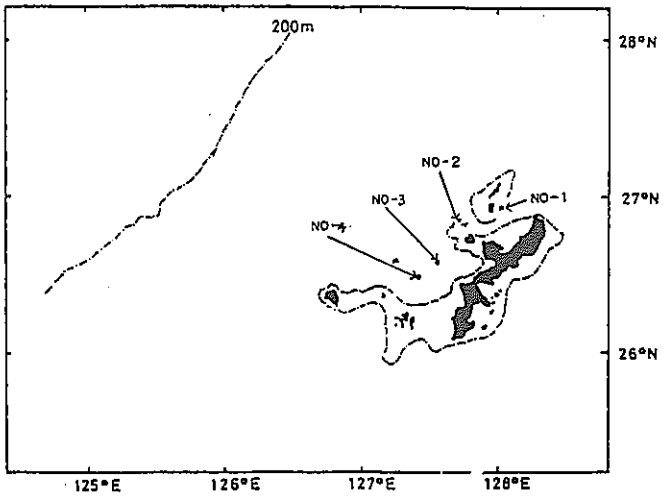

図１　調査海域

表１　第１次航海操業結果

操業No.	1	2	3	4
操業年月日	94,12,14	94,12,14	94,12,15	94,12,15
漁場位置	N 26°-56′	N 26°-50′	N 26°-34′	N 26°-31′
水深（m）	E128°-01′	E127°-41′	E127°-32′	E127°-26′
漁場名	350m	310m	320m	325m
マリタモドキ	1			
ギンメダイ	1			
マンザイウオ	2			
キビレアカレンコ		3		
ハナフエダイ		3		
ムシ				2
オキナワヤジリザメ				4
シマリシノザメ	85	89	35	
フジクジラ				2
サバフグ	25	1	15	
フトシノザメ				12

＊現職場：水産業改良普及所